若宮誕生

名前（　　）　日づけ（　／　）　できた数（　／28）

使い方　本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この場面の山は、最高敬語「させ給ふ」、謙譲語と尊敬語が重なる「参り給ふ」、寝ているのは誰か（主語）、そして公任の「若紫やさぶらふ」と反語「いかで〜む」**です。この確認テストは、解説記事と同じく〈若宮誕生の冒頭〉と〈五十日の祝いの公任の場面〉の二か所を扱います。

あらすじ＝中宮彰子が皇子（若宮）を産んで一か月ほど。中宮はまだ御帳台から出ず、女房たちはそばに控えている。中宮の父の藤原道長は、夜中も明け方もやって来ては乳母の懐の若宮を探るので、寝ていた乳母は寝ぼけて目を覚ます。道長が若宮を高く抱き上げてかわいがる姿を、作者はもっともなことだと見つめる。誕生五十日の祝いの宴では、藤原公任が「このあたりに若紫はおいでかな」と女房たちのほうをのぞきこむが、作者は、光源氏のような人もいないのに紫の上がいるはずがないと思い、黙って聞いていた。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

十月十余日までも、御帳（みちやう）①出でさせ給はず。西のそばなる御座（おまし）に、②夜も昼も候（さぶら）ふ。殿の、夜中にも暁（あかつき）にも③参（まゐ）り給ひつつ、御乳母の懐（ふところ）を④ひき探（さが）させ給ふに、⑤うちとけて寝（ね）たるときなどは、何心（なにごころ）もなく⑥おぼほれておどろくも、⑦いといとほしく見ゆ。⑧心もとなき御ほどを、⑨わが心をやりて⑩ささげうつくしみ給ふも、⑪ことわりにめでたし。⑫左衛門（さゑもん）の督（かみ）、「⑬あなかしこ、このわたりに若紫（わかむらさき）やさぶらふ」と、⑭うかがひ給ふ。源氏に似るべき人も見え給はぬに、⑮かの上（うへ）はまいていかでものし給はむと、聞きゐたり。

語注　十月十余日＝十月十日過ぎ。若宮の誕生（九月十一日）から一か月ほどたったころ。御帳＝御帳台。四方に帳（とばり）をたらした貴人の寝所。ここは出産を終えた中宮のいる所。御座＝貴人の座所。殿＝藤原道長。中宮彰子の父で、若宮の祖父。御乳母＝若宮の乳母（めのと）。乳を飲ませ、お世話をする女性。何心もなく＝何も気づかずに。無心に。おぼほる＝ぼんやりする。寝ぼける。ささぐ＝高く持ち上げる。あなかしこ＝ああ、おそれ多い。改まって呼びかける言葉。若紫＝『源氏物語』の女主人公紫の上の、少女のころの呼び名。源氏＝『源氏物語』の主人公、光源氏。ものす＝「あり・をり」などの代わりに使う動詞。※後半は、若宮の誕生五十日のお祝い（十一月一日）の宴の場面。※本によっては「いといとをかしく見ゆ」「源氏にかかるべき人」とする。

若宮誕生

A　語句の意味（1〜7）

（1）②「夜も昼も候（さぶら）ふ」の「候ふ」の意味を書け。

（2）⑥「おぼほれておどろく」の「おどろく」の意味を書け。

（3）⑦「いといとほしく見ゆ」の「いとほし」の意味を書け。

（4）⑧「心もとなき御ほど」の「心もとなし」の意味を、ここでの文脈に合わせて書け。

（5）⑨「わが心をやりて」の「心をやる」の意味を書け。

（6）⑩「ささげうつくしみ給ふ」の「うつくしむ」の意味を書け。

（7）⑭「うかがひ給ふ」の「うかがふ」の意味を書け。

B　文法（8〜13）

（8）①「出でさせ給はず」の「させ」の文法的意味と活用形を書け。また、「させ給ふ」のように尊敬語を二つ重ねた言い方を何というか。

（9）④「ひき探（さが）させ給ふに」の「せ」は使役・尊敬のどちらか。そう判断できる理由も書け。

（10）⑤「うちとけて寝（ね）たる」の「寝」の終止形と、活用の種類を書け。

（11）⑬「あなかしこ、このわたりに若紫（わかむらさき）やさぶらふ」の「や」の種類と意味を答え、結びの語とその活用形も書け。

（12）⑮「まいて」は、ある語が音便になった形である。もとの形と、音便の種類を書け。

（13）⑮「いかでものし給はむ」の「む」の文法的意味を答え、「いかで〜む」がここで表している意味を、疑問・反語・願望の中から選んで書け。

C 主語・指す内容・敬意の方向（14〜17）

(14) ①「出でさせ給はず」の主語にあたる人物を書け。

(15) ③「参（まゐ）り給ひつつ」の「参り」と「給ひ」は、それぞれ誰から誰への敬意を表しているか。

(16) ⑤「うちとけて寝（ね）たる」のは誰か。本文中の語で答えよ。

(17) ⑮「かの上（うへ）」とは誰のことか。

D 口語訳（18〜21）

(18) ③・④をふくむ「殿の、夜中にも暁（あかつき）にも参（まゐ）り給ひつつ、御乳母の懐（ふところ）をひき探（さが）させ給ふに」を口語訳せよ。

(19) ⑥・⑦をふくむ「何心（なにごころ）もなくおぼほれておどろくも、いといとほしく見ゆ」を口語訳せよ。

(20) ⑬「あなかしこ、このわたりに若紫（わかむらさき）やさぶらふ」を口語訳せよ。

(21) ⑮をふくむ「源氏に似るべき人も見え給はぬに、かの上（うへ）はまいていかでものし給はむ」を口語訳せよ。

E　内容・記述（22〜25）

（22）⑦「いといとほしく見ゆ」とあるが、作者が乳母を「いとほし」と感じたのはなぜか。殿の行動にふれて書け。

（23）⑪「ことわりにめでたし」とあるが、作者が殿のふるまいを「ことわり（もっともだ）」と思ったのはなぜか。

（24）⑬で、左衛門の督が「若紫」の名を出して女房たちに呼びかけたことから、当時の『源氏物語』についてどのようなことがわかるか。

（25）⑮のあとに「聞きゐたり」とあるが、左衛門の督の冗談に対して、作者はどのような態度をとったか。心の中で思ったことにもふれて書け。

F　文学史（本文全体をふまえて答える）（26〜28）

（26）『紫式部日記』の後半（手紙の形で書かれた部分）で、作者がきびしく批評している、皇后定子に仕えた女房の名と、その人の代表作を書け。

（27）⑫「左衛門（さゑもん）の督（かみ）」とは誰か。また、この人物が編んだ、漢詩文の名句と和歌を集めた作品の名を書け。

（28）⑬の場面は、寛弘五年（1008年）十一月一日、若宮の誕生五十日のお祝いの日の記事である。これにちなんで、今日、11月1日は何という記念日になっているか。

【テスト直前チェック】この三つ　❶「させ給ふ」「せ給ふ」は最高敬語。①は中宮、④は殿（道長）の動作。使役の相手が書かれていなければ尊敬と考える。　**❷寝ているのは乳母、「おどろく」は目を覚ます。**⑤〜⑦の主語は若宮ではなく乳母。「いとほし」は「気の毒だ」。　**❸「若紫やさぶらふ」は『源氏物語』が読まれていた証拠。**⑮の「いかで〜む」は反語。作者は答えず、心の中で受け流した。

▸古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　　▸解説記事にもどる